

自然との関わり合いの中で生まれ、暮らしに役立つものとして

大切に育まれてきた東北の手仕事。田中陽子さんは、地元である十和田湖畔に店を構え、職人さんとの二人三脚で今の暮らしに合うものを追求しながら、作り手の思いや生き方を伝えるようになって、30年近くになるそうです。

今月は田中さんに、日々の暮らしを彩る手仕事の魅力を教えていただきました。

素材と、技術と、人の営み。 手仕事には生きるための物語がある

東北の手仕事が、
長く愛されますように

織物や木工品など、東北には数々の手仕事があります。今の暮らしに使えるものを作っていたくために、私は作り手との信頼関係を第一に考えてきました。職人さんのもとを訪ねては膝を突き合わせるようにして仕事をさせてもらい、どんな気持ちで作っているのかを全身で感じ取る。何度も、

通って互いの心がほぐれ、職人さんが自らの生き方を話してくださる時は本当にうれしいですね。この方の仕事をぜひ紹介したい、と心底思います。

お客様には、素材や技術の魅力を含めて作り手の顔が見えるように。壊れても修理できますから、できるだけ見捨てないで、ということもよく伝えます。

ある職人さんが言いました。「どんな美しい仕上げよりも、使われることに勝る仕上げはない」と。新品もいい

た なか よう こ

田中陽子さん 60歳

暮らしのクラフト ゆずりは 店主

1955年青森県生まれ。青森、秋田、岩手をはじめとする東北の工芸(手仕事)を伝え、今の暮らしに生かせる道具を提案。著書に『ゆずりはの詩』(主婦と生活社)がある。





マム・ライフ・エッセンス

お雛様に見立てた石で心を和ませる

かごを作る職人さんからプレゼントしていただいた石雛。見ていると何だかとても心和む形で、いつも枕元に置いています。



人生のターニングポイントで出会った、大切な仏様

人生で一番つらかった時にラオスで出会った仏様。今を厭うことも憂えることもなく、ありのままに受け入れる。見るたびにそんな気持ちを思い出します。



暮らしの中で生まれた手仕事の尊さを

ものですが、使われた跡が残るものほど素晴らしい。なぜなら、ものには使う人の過ごした時間、毎日の暮らしと意思が残るからだそうです。

東北の手仕事は、厳しい気候や風土の中で育まれてきました。

私の生まれた青森県の南部地方はやませという風が吹くと作物が育たず、かつて人々は食べるものも着るものもままならない暮らしをしていたそう

です。その中で女性たちは家族の衣類を作るために織物を生み出しました。毎日の暮らしに追われながら麻を育てて糸を作り、夜なべで仕事をする。その時間は、女性たちにとっては厳しい現実から解き放たれて無心になれる、貴重なひとときだったのかもしれない。

私は、愛情の深さと強さが生んだ手仕事を美しいと感じるとともに、恵まれない条件の中で生み出された、生きる知恵やちからほど尊いものはないと思うんです。手に取るたびに何だか気持ちがシャキッとしますね。

生きるちからとなるものは自分自身のすぐそばに…

これまで出会った職人さんは300人以上。皆さんもの作りが生きがいですから、私も全身全霊で仕事に向き合わなければ申し訳ないですね。

私は店でお客様をお迎えするほかに、全国各地で東北の手仕事を伝えています。東北の手仕事を「あ、いいな」と思ってくださった方が、ご自身の地域の文化や身のまわりのものに向けてくださったら本当にうれしいですね。生きるちからとなる素晴らしい物語は案外、足もとにあるのかもしれない。